

あの世から便りをする話

——座談会から——

海野十三

青空文庫

僕の友達で人格も高く、学問の上からも尊敬され、友人からも非常に尊敬されていた男があつたんです。それが不幸にして最愛の細君を失いました。

或る日、その友達が私の所へ来て、「『心靈研究会』というものがあつて、其処に実に素晴らしい霊媒が見付かった。自分は今まで研究をして居つたけれども、これ以上の霊媒はない」事実、霊媒を通じて奥さんと話すると、いろいろ符合する所があるそうで、例えば奥さんが夫には内緒で、指輪を奥さんの妹に買ってやった。それを先方で言い出したのです。「あなたに内緒で妹に指輪を買つてやりましたが、誠に済みませんでした」と言つた。これこそ誠に絶好なものであるといふので、家へ歸つて死んだ細君の妹に聞いて見ると、まさしくその通りでした。その中に細君が夫の科学的興味に共鳴をして、あの世の話をいろいろして呉れたのです。例えばあの世に行けば皆んなが神様のお祠みたいな所へ入つて、朝から晩までお勤行をしているといふような事や、空中を白い着物を着て飛んで行ける事や、大田野原で、机が出て来いと言つと机が忽ち出て来る。こういう物が欲しいと思えば直ぐ眼の前に現れるといふ、海にお伽噺の世界みたいです。それから守護神といふのが附いて居つて、この守護神は青年団の団長みたいに、沢山後からやつて

来る霊の世話をする。死んだ当時は非常に世の中が暗いが、だんだん修行している中に視力が恢復して来る。つまり夜が夜明けになって昼間になって来るように、だんだん明るくなる。百年も経てば丁度真昼のように四辺あたりが明るくなる。細君もかなり修行したけれども、それでもまだまぶしい位の明るさしかない。そういうようないろいろ話をしまして、その守護神というものに頼めば、大体どんなことでもして呉れる。自分が今あなたに言つて居るのも、その守護神の許しを受けて、又その守護神の庇護ひごに依つてあなたに言つて居るのだというような話をして、結局私の友達は、未来の世界があることをよく知ることが出来たが、その未来の世界なるものには一向どうも科学者が働いていないように思えた。自分の現在いまこの世でやっている科学というものは、結局どうも無駄なものである。向うの世の中へ行つてやる科学こそ、最も最後のなものである。それから細君と前後六十回も話をしたでしょうが、私も一緒に行けと言われたんですが、遂に私は行かなかつた。友達は私を詰問なげつて言うことに、君も細君を亡くしているくせに、何という細君不孝だ。是非共細君を呼んで死んでるといふ自覚を起さしたり、その他いろいろやってやらないと、死んだ細君は浮ばれないぞ、と叱るのです。

その中に友達は遂ついに自殺をしました。早速さつそく私共も行きましたが、千葉の勝浦かちんげんの権現

堂のある山の頂上で死んでいました。其処は死んだ細君と知合になった当時、能く両人が散歩した所だそうで、而も死んだのは、彼のみならず、夫婦の間に来た、たった一人の子供も殺して死んだ。

さてその死後、友達の遺書というのが、私ともう一人の矢張り科学者の友達に遺されてきました。その遺書で彼の死んだ事情が最もハッキリして居るのですが、「皆私を引止めて呉れたけれども、自分は科学者として死を選ぶのが一番善いと思つたんで死ぬ。あの世で大いに科学のために奮闘して、心霊科学も研究し、君達に呼びかけるから、君達も何なら早く来たらどうか」こういう事が書いてありました。

私共非常に呆然としまして、科学的に最も尊敬すべき友達が、科学的に心霊というものを信じて死んだ。これは私共頭が悪いから、彼からいくら説明されても、矢張りあの世の在るということが分らないのだろう。とにかく彼が行き着いたかどうか、探して見ようじゃないかという議が、吾々仲間に起つたのです。今度は人数が大分多くなつて、十人ばかりの同志がその心霊研究会へ行つて友達を呼び出して貰つたんです。

友達が出て来ました。が、少々怪しい友達が出て来た。いつもその友達から聞いていたんですが、霊媒を通じて出て来る細君は自分の細君と全く同じで、咳払いから、声の抑

くよう
揚から、話振りから、笑い声から、何から何まですべて百パーセントに死んだ細君そつくりである。それで思わず霊媒と手を取り合うようなこともあったんだという話をしましたが、私が行った時には、少々がさつな友人が出て来た。いろいろ話をしたんですが、結局どうもあの世に無事に行き着いたから安心して呉れろ、という極めて普通な話ばかり出るので、少し専門的な話をして見ようと思ひ、始めたところが「今少し頭が悪いから」というので、は 勿ねられました（笑声）。

私はその友達から原稿を一つ預かっていました。それは雪の降る日に歌った新体詩しんたいしでしたが、それを何処かへ世話して呉れと頼まれていたんです。「僕は君の原稿を預かって居るが、あれは何時いつ出したら宜よかろうか」と聴いて見ました。そうしたら「そうだね、それは臆おそて一週間程すると僕の四十九日が来るから、その時に一つ出して貰もらいたい」こういう話でした。ところが一週間後の四十九日という日は、八月の最中さなかです。八月の最中に雪がチラチラ降る新体詩が出せるものか出せないものか、これはオヤオヤと思つたです。第一、原稿ということがどうしてもその友達に呑み込めないのです。生せい前ぜん原稿を毎日書いていた位の男が、死ぬと急に原稿が何であるかということ知らなかったのはどうも訝おかし。分らずに苦しがつていたから「原稿というのはつまり君が何時いつだか書いた文章のこと

だ」と僕が助け舟を出してやって初めて分つたのです。その中に到頭友人は大分苦しがりまして、愈々引込むことになりました。「まだ話があるけれども、実は僕の妻が君に逢いたいそうで待っているから、替る」というので、振切るようにして友達の霊は無くなりまして、今度は細君が出て来た。忽ち細君の声に変わりました、非常に優しい声です、やって居る霊媒はお婆さんですから、女の方がうまく行くでしょう。「どうも生前はいろいろお世話になりました」から始まりまして（笑声）、結局最後に「何か申し残したい事はありませんか」と言つたところが、「それでは一つお願いがあります、実は品川区に私の伯母が住んで居りますが、その娘のチーちゃんを早く一遍此処へ来て貰うように言つて下さい」という頼みで別れました。その次の日でしたが、偶然品川駅の近所で、そのチーちゃんのお母さん、つまり死んだ細君の伯母さんに当る人に出会つたので、「あの友人の細君があなたの娘さんのチーちゃんに合いたい、成るだけ早く来て呉れと言つて居りましたよ」と言つたんです。そうしたら伯母さんが怪訝な顔をして、「それは訝しい。チーちゃんというのは私の家の娘ではありません。あの子の真実の妹でございますよ」と言つた。つまり死んだ細君は、自分の妹のことを伯母さんの子供みたいに思っていた訳です。其処も非常に間違つて居る。

そんな点からして、この霊媒は非常なインチキであるということが判ったんです。しかもそんなインチキな霊媒の所に、吾々が科学的に非常に信用していた友達や、前後六十回も通つてインチキたるものが判らなかつたのは何故であるかというので、俄然がぜん私は大なる疑問に打突ぶつかつたんです。同時に又インチキであるが故ゆえに、当初これは未来の世界があると面白いなという科学の問題に対する楽しみがあつたんですが、霊媒を通じて見ると、それもインチキであるということが判つて、淋しがつたり苦しがつたりしたものです。

そこでその友達の友人に当る某医学博士を訪ねて聞いて見ましたところが、簡単にその問題を解決して呉れたのです。「いや君、あの男は最初から発狂して居つたのだよ」(笑声)。「だって先生、科学的には非常に信用が置けるし、言うことも普通であるし、友誼ゆうぎも潔癖けつぺきであるほど厚いし、殊ことに細君の事など潔癖で、細君が死んでから他の女には絶対に接しなかつたという程の人格者としては訝おかししいですが」「いや、それが訝しくない。そういう立派な人に能く狂人がある」という話でした。

そのインチキ心靈研究会が後になりまして、非常に功名を立てたという話があります。つまり毒を以て毒を制した話です。

丁度今頃の初夏しよかどき時でした。私の所へ九州から訪問客がありました。「是非一つ先生に

助けて戴きたい」と、私が先生になつたんですが、「実は、先生がこの前お書きなつた電波病というのに罹りまして、電波が聴えて仕様がな。現に先生の前に坐つて居りますが、私の所へ電波が掛つて居るのが能く聴えます。さかんに只今やつて居ります。そのため私は失業しました。そうして身体は痩せ衰えるばかりで、非常に電波に妨害されて居ります。先生のお力を以てこの電波を止めて戴きたい」と言うのです。

これは一種の病人でありまして、その頃勤め先の役所へも、度々そういう投書が来ました。私の所へ来る電波は、こちらから見て居ると、放送局のマイクロフオンの前で三人の男が並んで居る。二人は髭がないが、一人は髭がある。眼鏡を掛けたのが二人と髭のあるのが一人いて、それが何時も私に向つて罵詈雑言を致します。いくら止めると言つても止めませぬ。しかも受信機がなくてこれが聴えるから、洵に始末が悪い。安眠も出来ないから、お止めを願いたいというのであります。

さて、乗込んで来た人物を見ると、洵に眼つきから何から只者でない。生憎私の部屋なるものが、袋小路の突当りみたいな部屋でして、どうにも逃げる隙がない。そこでいろいろ考えたのですが、丁度最前の友達が死んで間もなくであつたものですから、咄嗟に思いついてその友達の話をすることにしたのです。

それから私は落ち着き払ったような恰好をして「それは誠にお気の毒である。実はそういう電波があります。これは心霊波しんれいはと名付けますが、人間のうちでも誠に感度の良い人でないと、この電波は分らぬ。実は私の最も信用する友達で、最近心霊波の研究をするために自ら自殺みずかをしたのがあります」という話に移りまして、「あの世とこの世との交通が心霊波で結ばれ、そのために霊媒という受信機みたようなものもある。結局これは心霊波の元締もとじめをやつて居る守護神しゅごじんというものに頼んで、その電波を止めて貰うより仕様しようがない、あなたをひとつ心霊研究会へ御紹介するから、行ってごらんになったら宜よかろう」とその患者さんに名刺を渡して先方むしやうへ行つて貰うと同時に、私は心霊研究会へ電話を掛けまして「今斯こう斯こうした人が行くから、宜よろしく頼む」とやりました。

これで危難を逃れた形ですが、到頭とうとう一年ほど経ちまして、その男が元気になつてやつて参り、「私は愈々いよいよ郷里よくにへ帰ろうと思ひます。郷里の方も大変忙がしく、それに電波ももうこの頃じゃ殆んど聴えない。その上心霊研究会へ一日に一円ずつ払つて（笑声）やつても居られませぬから、一応郷里へ帰つて参ります」と、非常にせかせかと私に礼を言つて帰りましたが、多分それは正気になつてしまつたんだろうと思ふんです。結局そうして見ると、これは矢張り心霊研究会の威力であつたんだろうと思ふのです。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 別巻2 日記・書簡・雑纂」三一書房

1993（平成5）年1月31日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1935（昭和10）年7月号

※初出は、大下宇陀児、浜尾四郎、甲賀三郎、江戸川乱歩、城昌幸、木々高太郎、小栗虫太郎、海野十三の原稿を、座談会形式で集めた「持ち寄り奇談会」。そこから、海野の執筆分を抜き出し、「あの世から便りをする話」とした底本には、他の「出席者」の「発言」が付されていますが、著作権の切れていないものが含まれているので、このファイルにはおさめませんでした。

入力：田中哲郎

校正：土屋隆

2005年1月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

あの世から便りをする話

——座談会から——

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 海野十三

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>